



京都教区の皆様

2020年4月11日

2020年 復活徹夜祭 司教説教

今年の復活徹夜祭で洗礼を受ける予定だった洗礼志願者の皆さん、コロナウイルス感染症対策で、洗礼が延期になりましたが、京都教区のわたしたちは、四旬節の間、ミサはなくても、志願者の皆さんとこころを合わせて歩んできました。皆さんはもうすぐ洗礼式で信仰を宣言し、キリストの復活の証人として生きる人生が始まります。それは、イエスの復活の朝、墓に行った女性たちと同じです。そこで、イエスの遺体を納めた墓が「空」であったことの意味を考えてみましょう。

墓というのは何を意味しているのでしょうか。墓とは、人生の末に辿り着く終焉の場所です。イスラエル人たちにとって、先祖の墓に葬られ、その列に加えられることは最上の喜びでした。最後の魂の落ち着きどころ、安住の場所だったからです。しかし、イエスのためにアリマタヤのヨセフが用意した墓は、まだ誰も葬られていない新しい墓でした。イエスの埋葬は、先祖の墓で安住するためのものではありませんでした。

週の初めの日の明け方、2人の女性たちが墓に来てみると、天使が降りて来て、大きな地震が起こり、墓の石をわきに転がしたので、墓の入り口が開かれました。女性たちに空の墓を見せるためです。天使が二人のマリアに言います。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのですが、ここには、おられません。前から言っておられたように、よみがえられたのです。来て、納めであった場所をごらんください。」空の墓は、イエスの復活を悟らせるための「しるし」となりました。天使は、イエスの復活を弟子たちに知らせるように命じます。女性たちは途中で、復活されたイエスから「おはよう」（直訳は「喜びなさい）」、「恐れてはいけません」と語りかけられます。空の墓という「しるし」を見たことと、イエスのことばを受けたことで、女性たちは、キリストの十字架と復活の確かな証人とされました。

今日の使徒書の朗読でパウロは言います。「あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを」。キリスト者は、洗礼を受けた後も、人生の多くの試練にさらされます。悲惨で不可解な出来事の中で、信仰の喜びも力も感じられないことがあります。逆に、つらさや悲しみを押しつぶされ、人は生きながらも「死んだようになります。そのような時でも、キリストによって救われているという真実は全く変わらないのです。このことをキリスト者は決して忘れません。復活を信じるとは、死後の世界の延長を信じるのではなく、時間を超越した神との現在の交わりを生きることです。パウロが言うように、新しい命に生きるために、わたしたちは罪に対して死んでいますが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのです。

直近の教皇フランシスコの使徒的勧告のタイトルは、『キリストは生きている』です。このタイトルは、キリストは永遠に生きている方だから、どのような時でもキリストにすがっていれば、人生のあらゆる荒波を乗り越えて、希望をもって生きていけるといふ、教皇自身の信仰告白だと、わたしは思います。教皇は、このような信仰が、「わたしたちが、加入すべき保険」だと言われます。人生の重荷に疲れ果て、生きているのに、死んでしまったように倒れ、息も絶え絶えになっている人を「立ち上がらせる」保険です。

京都教区の皆さん、復活したキリストは生きていて、わたしたちとともにおられます。今のパンデミックという不安と混乱が広がるなかで、この復活信仰という保険を更新しましょう。洗礼を受ける方々と共に、世界中の人々とともに、いのちの与え主である神の救いの業を記念し、感謝をささげ、救いの恵みを告げる勇気と力を祈り求めましょう。絶望と悲しみの内にいる人々、病氣と闘っている人々、生活の不安を抱えている人々と連帯し、自分たちの愛のある行動で、生きる希望と力を与えてくださる神をあかししましょう。

+ ハウに大塚喜直